Title	日本漫画産業の特異点「ときわ荘」における事例分析 : コンテンツ産業における人材集積拠点形成メカニズ ムへの示唆(人材問題(3),一般講演,第22回年次学術大 会)		
Author(s)	河尻,耕太郎; 前田, 征児; 竹内, 寛爾; 金間, 大介		
Citation	年次学術大会講演要旨集, 22: 1144-1147		
Issue Date	2007-10-27		
Туре	Conference Paper		
Text version	publisher		
URL	http://hdl.handle.net/10119/7485		
Rights	本著作物は研究・技術計画学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Science Policy and Research Management.		
Description	一般講演要旨		



# 日本漫画産業の特異点「ときわ荘」における事例分析

## ~コンテンツ産業における人材集積拠点形成メカニズムへの示唆

河尻耕太郎(産業技術総合研究所) 前田征児, 竹内寛爾, 金間大介(文部科学省科学技術政策研究所)

本稿では、マンガ産業の特異点である「ときわ荘」を事例に、人材が集積する過程を踏まえ、集積した人材が飛躍的に成長するメカニズムを明らかにするとともに、今後の産業育成政策への示唆を提供する。市場の変化に対応して、人材と市場の「ゲートキーパー」である編集者と漫画家の両者が極めて合理的な意思決定を行い、その結果としてときわ荘という生産システムが生みだされた。また、人材の集積と、それに伴う濃密なコミュニケーションにより、拠点に集積した人材が飛躍的に成長を遂げていった。

## 1. はじめに

競争力のある産業の歴史を紐解くと、ある時点において極めて特異的に、その国の産業競争力を向上させるような人材が集積する拠点が生まれることがある。それは、アメリカのシリコンバレーやハリウッドのように、産業として地理的広がりのあるものや、もしくは著名な企業や大学のように固定化された組織体として持続的に活動を続けるものもある。共通するのは、ひとたび社会から拠点として認知されると、まさに成功が成功を呼ぶように、拠点が成長する好循環が生まれ、国の産業競争力を飛躍的に向上させる。

古くから日本は、自動車や半導体など、伝統的に製 造業において強みがあることは知られているが、その 一方、アニメーションやゲームなどのコンテンツ産業 においても、世界的に高い競争力を有している。近年、 ポケットモンスターや宮崎駿の映画などが世界的にも 大成功し、極めて高い評価を得たことは記憶に新しい。 Joseph S. Nye は、文化や芸術などの影響力をソフト・ パワーとして定義しており[1]、世界に日本のプレゼン スを発揮するという意味でその貢献は計り知れない。 しかし、日本のコンテンツ産業は最初から競争力があ ったわけではない。戦後のある時点において、飛躍的 にその競争力を向上させたのである。その競争力の向 上に大きく貢献したのが、手塚治虫や石ノ森章太郎な どの、戦後の漫画産業黎明期に活躍した漫画家達であ ることは良く知られており[2-3]、当時の漫画産業の歴 史を紐解くと、まさに人材が集積した拠点が存在して いた。それが「ときわ荘」である。

そこで本稿では、日本の漫画産業における特異点である「ときわ荘」を事例に、有能な人材が集積し、飛躍的に成長するメカニズムを明らかにすると共に、今後の産業政策に対して普遍的な示唆を提供することを目的とする。

## 2. ときわ荘について

ときわ荘とは、東京都豊島区に 1952 年から 1982 年にかけて存在した木造モルタル造りの 2 階建てアパートである。当時、漫画雑誌出版社「学童社」が、1953 年に自社の雑誌で連載を持つ手塚治虫をこのアパートへ入居させたことが、ときわ荘が漫画産業の拠点となるきっかけである[4]。ただし、手塚治虫がときわ荘で暮らした期間は約2年と短く、外泊することも多かったため、居住空間としてはそれほど利用してはいなかった。しかしその後、後述する若手の新人漫画家達が集積するようになり、徐々に漫画家達の梁山泊のような観を成していったのである。

手塚治虫以降に入居したのは、地方から上京してき た、1930年代生まれの若手漫画家10名である。最初 に入居したのは寺田ヒロオで、学童社の編集者に紹介 されて 1953 年にときわ荘に入居 (1957 年転居)。藤 子不二雄(藤本弘、安孫子素雄)は、安孫子素雄が手 塚治虫を訪ねて上京した際に、寺田ヒロオを紹介され て意気投合し、彼の誘いを受けて1954年に入居(1961 年転居)。鈴木伸一は、1955年に寺田ヒロオらをたよ って入居(1956年転居)。森安なおやは、寺田ヒロオ らの勧めによって 1954 年に鈴木伸一の部屋に同居 (1956年転居)。石ノ森章太郎は、当初ときわ荘近く のアパートに入居していたが、程なく寺田ヒロオより ときわ荘の部屋に空きが出たとの知らせを受けて 1956年に入居(1961年転居)。赤塚不二夫は、石ノ森 章太郎がときわ荘に入居すると同時に彼の部屋に同居 し、後に別室を借りる(1961年転居)。よこたとくお は、当初赤塚不二夫と下宿に同居していたが、彼が石 ノ森章太郎とともにときわ荘に入居した後、1957年に 入居(1960年転居)。水野英子は、現在の講談社の編 集者に見出され、1958年に石ノ森章太郎、赤塚不二夫 と合作を書くために入居(4ヵ月後に帰郷)。

### 3. 研究方法

本研究では、ときわ荘関係者の著作の中から、とき わ荘入居当時を回想している記録の抽出を行い、それ らの記録の統合、比較を行うことで事実関係を明らか にし、一般的傾向を見出した。

定量的なデータとしては、出版科学研究所による出版指標年報から各雑誌の発行部数のデータを引用した[5]。また、国立国会図書館の蔵書検索システム(NDL-OPAC)により、漫画単行本のデータを抽出し、漫画家の人数や、漫画家の作品点数などを分析した。NDL-OPACにおける検索方法は、まず書籍の分類項目から漫画単行本を示す項目(NDC分類の726.1の項目、NDLC分類におけるY16、Y84)で漫画単行本全体の集合をつくり、これと著者標目条件とのAND検索を行うことで、各漫画家による単行本の集合の抽出を行った。

#### 4. ときわ荘形成のメカニズム

ときわ荘が形成されたのは、次の3つの要因(①市場の動向、②産業の構造、③個人的な動機)による。

図1に漫画雑誌発行部数の年度推移を示す。まず市 場の動向であるが、当時はまさに戦後の漫画産業の隆 盛期であり、その駆動力となったのは、1949年をピー クとする戦後の第一次ベビーブーム世代である[6]。 べ ビーブーム世代が幼年期に脱しつつあった1959年に、 我が国初の児童向け週刊誌である「週刊少年マガジン」 (講談社)、「週刊少年サンデー」(小学館)が創刊され、 青年期に差し掛かった頃に青年向けのコミック誌が創 刊された。特に、漫画産業の構造を大きく変えたのは、 月刊誌から週刊誌へのシフトである。当時、一般家庭 へのテレビの普及が進み、ベビーブーム世代が幼年期 を脱しつつあったことが、児童漫画を主とする漫画産 業全体の大きな懸念事項であり、週刊誌の創刊に踏み 切らせた[7]。業界全体が週刊誌の方へシフトすること で、漫画の生産サイクルが大幅に短縮され、生産性を 飛躍的に向上させる必要に迫られたのである。この不 連続かつ大幅な需要増に対応するため、各社は著名漫 画家の獲得競争にはしるとともに、足りない部分につ いては、新人漫画家の起用によって補った。

次に、産業構造上の理由であるが、漫画の制作プロセスを考えると、一つところに漫画家が集積するような力が生じる[8]。その第一の理由として、編集者との綿密なコミュニケーションがあげられる。編集者は市場の動向や、顧客のニーズ、漫画家の特性などを良く知っており、それらの知見に基づいて、製作工程上流において漫画家とテーマについて意見交換を行う[7]。また、締め切り前の原稿の催促や、漫画家の逃走を阻止するため、製作期間中も監視する必要があった[7]。

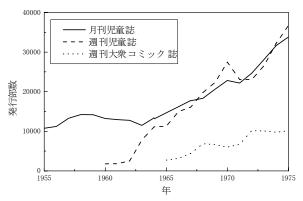


図 1. 漫画雑誌発行部数の年度推移 (出版科学研究所のデータを元に著者が作成)

さらに、出来上がった漫画に対しても品質の向上のた めに修正を求めることもあった。そのため、漫画作成 の各製作工程において編集者と漫画家は密接にコミュ ニケーションをとる必要があり、新人であればよりそ の傾向は強かった。しかし、当時は主な連絡手段は電 報や手紙などであり、意思疎通における制約条件が厳 しく、編集者と漫画家が地理的に近くに居住すること は極めて大きな利点であったのである[7]。出版社が、 手塚治虫、寺田ヒロオ、水野英子にときわ荘を紹介し たのはそういった理由からであった[4]。第二の理由と して、漫画家同士での仕事の助け合いである。漫画産 業においては、仕事の依頼は著名な漫画家に集中する ことが知られており、一人の著名な漫画家がいくつも の連載をてがけることは珍しくない[8]。しかし、漫画 の制作は極めて労働集約的な作業であり、その作業量 には物理的な限界が存在する。当時は徒弟制度的な手 伝いはあったものの、現在のようなプロダクション制 度は完全に確立されてはいなかった[6]。まして、若手 の漫画家がアシスタントを雇うことなどは実質的に不 可能であり、当然全ての作業を一人でこなさねばなら なかった。そのため、当時の若手漫画家同士の間では、 しばしば仕事をこなしきれなくなる自体に直面した際 には、互いに制作の手助けをすることが慣行となって いたのである。ときわ荘のように漫画家が集積してい れば、お互いの仕事を助け合う上で非常に大きなメリ ットであった。こういったスケールメリットについて は、編集者側も意識しており、著名漫画家が仕事をこ なしきれなくなった際や、新しい企画などを持ち込む 際にも、ときわ荘に持ち込めば大丈夫だという安心感 があった[7]。最後に、情報の集積である。基本的に原 稿の依頼は、極めて俗人的なやり取りの中で決まって おり、編集者が多く出入りするときわ荘にいることで、 そういった機会が得られる確率が高かった。以上のこ とから、出版社の近辺に漫画家が集積することは、両 者にとって大きなメリットであった。

最後に、個人的な動機であるが、これもいくつかの 項目にわけられる。まず、生活上の動機である。1959 年時の安孫子素雄の確定申告書を見ると、年収 95 万 円とあり、課税所得 57 万円を差し引くと、月の生活 費が3万円ほどである[9]。しかしこれは彼が漫画家と して軌道に乗った後の収入であるから、入居当時の状 況はより指し引いて考える必要がある。当時の回想に よると、一人暮らしで慎ましく生活した場合、食費が 4000~5000 円かかり、光熱費などを考えると、とき わ荘の家賃3000円が、駆け出しの漫画家にとっての 上限だったと推測される[10]。次に著名な漫画家への あこがれである。当時の若手漫画家にとって、手塚治 虫は神のような存在であり、その近くで働きたいとい うのは大きな動機であった。また、気心の知れた仲間 達と同居できるということも大きな動機となっていた。 ときわ荘に集まった漫画家は、その多くがときわ荘に 入居する前から顔見知りであった。当時は、学童社の 「漫画少年」誌に投稿、入選することが、新人漫画家 にとっての登竜門であり、ときわ荘のメンバーはその 常連であった。寺田ヒロオを中心として結成された「新 漫画党 [11]や、石ノ森章太郎を中心とした「東日本 漫画研究会」[12]は、ときわ荘入居前から漫画家コミ ュニティとして活動しており、ときわ荘に入居したの は、その中心メンバーの中で地方から上京してきた者 達であった。特に、寺田ヒロオの存在は大きく、金銭 面や、技術面、精神面など、様々な側面からメンバー をサポートしていた[11]。従って、そういった気心の 知れたメンバーが先に入居していたことが、ときわ荘 に入居する強い動機となっていた。

以上の3つの理由により、漫画家、特に地方から上京してきた若手の漫画家達がときわ荘に集積するメカニズムが生まれたのである。

## 5. ときわ荘における人材成長メカニズム

今から当時の入居者の顔ぶれをみると、まさに漫画産業を代表する漫画家達が集まったかのように見える。しかし、彼らがときわ荘に入居した当時は、先の見通しもつかない、駆け出しの若手漫画家の一人に過ぎなかった。彼らがときわ荘入居後に飛躍的にその能力を開花させ、次々と有名になっていく過程において、ときわ荘はまさに漫画産業における聖地のような存在となったのである。他にも、つのだじろうや永田竹丸、長谷邦夫など、頻繁にときわ荘に出入りし、後に大成した漫画家も多い。図2に、国立国会図書館に所蔵されている1930年代生まれの各漫画家単行本の、1940年から1999年までの発行点数合計と、その人数分布を示す。1930年代生まれの漫画家による単行本は9265点であり、計上された漫画家は909人にのぼる。

しかし、その半数以上は1冊のみの計上で、10冊以上書いている漫画家は全体の1割足らず、100冊以上書いている漫画家はたったの18人しかおらず、生産構造は非常に偏在性であった。表1に、単行本の発行点数が多い漫画家順に、発行点数と順位を示すが、上位10位以内にときわ荘の漫画家が4名(表中の藤子不二雄は藤本弘、安孫子素雄2名分を合計)入っており、発行点数の点からもその実力は群を抜いている。このことからも、彼らが後年如何に高い生産性を誇っていたかが伺える。この成長の要因について以下で述べる。

まず、ときわ荘が他の拠点と根本的に異なるのは、職場と生活の場を兼ねている点である。狭い空間で寝食を共にすることで、必然的に極めて頻繁にコミュニケーションをとることになる。また、前述の通り、漫画家と編集者は綿密なコミュニケーションをとる必要があるため、漫画家が集積していると、編集者と接触を持つ機会が多くなる。そして、人材が集積し、漫画家同士、あるいは編集者とが綿密にコミュニケーションをとることで、①機会、②精神面、③技術面の3つの側面で大きなメリットがあった。

まず機会であるが、前述の通り、ときわ荘の漫画家 達は横の連携で相互に助け合っており、編集者として は仕事を任せる上で安心感があった[7]。そのため、と きわ荘の漫画家達は必然的に仕事の機会を多く得るこ とが出来、その分技術や生産性が向上した。また、機 会の多さは、自らのジャンルの確立という側面からも 大きな利点であった。例えば赤塚不二夫は、当初なか なか芽が出ず、石ノ森章太郎のアシスタントのような ことをしていたが、あるとき石ノ森章太郎からギャグ 漫画の原稿を融通されたことがきっかけとなり、自ら のジャンルが確立され、一気に才能が花開いた[4]。ま た、寺田ヒロオも、編集者からの依頼によって、偶発 的に自らのジャンルを確立できた述懐している[11]。 業界全体の需要増にも後押しされたとはいえ、仕事が 著名人へと集中しやすい漫画業界において、機会が得 られるということは、若手漫画家達にとっては何より も大きなメリットであった。

次に精神的な側面であるが、ときわ荘の漫画家、あるいは有志メンバーは、フォーマル、インフォーマルに関わらず非常に頻繁にコミュニケーションとっており、お互いのライバル心などが刺激され、モチベーションが向上した[10,12]。また、仕事がうまく行かない時は、互いに励まされることも多く、そのことが仕事を長く続けることが難しい業界において、モチベーションを維持する支えとなっていた[4]。

最後に技術的側面であるが、実はときわ荘のメンバー同士で技術的な情報交換をしていたという記述は少ない。インフォーマルなやり取りの中で、お互いの挑

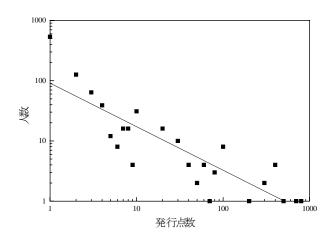


図 2. 漫画単行本の発行点数ごとの 1930 年代生まれ の漫画家の分布

戦的な試みについて情報交換していたことはあったものの、主な会合の内容は、ときわ荘以外の漫画家の作品についての品評や、お互いのデッサンの比較などであった[4,9·12]。むしろ重要なのは、そういった直接的な情報交換よりも、娯楽などを通じた間接的な能力の向上にあったと思われる[4,10·12]。例えば彼らは、一人が話しの発端を作り、別の一人がそれを展開し、最後の一人がまとめてオチをつけるという「しりとりストーリー」という遊びを発明している。また、映画鑑賞や、文芸作品を読み、それらの情報を共有、議論することで、後年主流となっていくストーリー漫画作りに必要な能力を向上させていた[4]。

以上のことから、上京したての若手漫画家達が、将来の見通しなど全く立たなかった状況において、ときわ荘のシステムはまさにそのインキュベーターとして極めて効率的に機能したのである。

#### 6. ときわ荘の解体

ときわ荘が解体される 1982 年のはるか前に、漫画家達はときわ荘から転出していた。その最大の理由は生活水準の向上である。前述したように、ときわ荘に漫画家達が入居したのは、財政上の余裕がなかったことが大きな理由の一つである。そのため、それぞれが漫画家としての実力を向上させ、生活水準が向上した際には、生活の場所兼職場としてのときわ荘は手狭になる。また、結婚によって伴侶を得た場合も、やはりときわ荘では暮らしがたい。つまり、漫画家達は必然的にときわ荘に集結し、必然的に転出していったのである。しかし、ときわ荘そのものがなくなったが、後のプロダクションシステムに通じる雛形としてのときわ荘のシステムは、ときわ荘から分散していった漫画家達が、それぞれ同様のシステムを作っていったことで後年へと受け継がれていった[4,12]。

表 1. 1930 年代生まれの漫画家の発行点数順位

名前	発行点数	順位
藤子不二雄	845	1
石ノ森章太郎	763	2
水島新司	504	3
横山光輝	466	4
白土三平	445	5
ちばてつや	439	6
松本零士	404	7
楳図かずお	347	8
赤塚不二夫	305	9
さいとう・たかを	266	10
水野英子	60	25
寺田ヒロオ	18	61
よこたとくお	13	74

#### 7. まとめ

- ・新たなメディアへの適応性、受容性の高い世代の増加が新たな市場を生み出し、生産現場の方も自らその構造を変革することで市場の変化に対応した。
- ・市場動向、産業構造、個人的動機などによる、漫画 家、編集者両者の極めて合理的な意思決定の結果とし て、ときわ荘を形作るメカニズムが生まれた。
- ・ときわ荘における人材成長システムは、生活の場を 共有することによる、漫画家同士、あるいは編集者と 漫画家との極めて綿密なコミュニケーションにより成 り立っており、機会、技術的、精神的な側面で有効に 働いた。
- ・ときわ荘そのものは解体されたが、そのシステムは 次の時代に対応するためのロールモデルとして、後年 のプロダクションシステムへと受け継がれていった。

## 参考文献

- [1] Joseph S. Nye, Soft Power: The Means to Success in World Politics, Public Affairs,  $2004_{\circ}$
- [2] 竹内オサム, 戦後マンガ 50 年史, 筑摩書房, 1995。
- [3] 岡田斗司夫, オタク学入門, 太田出版, 1996。
- [4] 手塚治虫&13人, トキワ荘青春物語, 蝸牛社, 1995。
- [5] 国出版協会出版科学研究所,出版指標年報,1955-1975。
- [6] 中野晴行、マンガ産業論、筑摩書房、2004。
- [7] 丸山昭, ときわ荘実録ー手塚治虫と漫画家達の青春, 小学館, 1999。
- [8] R. E. Caves, CREATIVE INDUSTRIES -CONTRUCTS BETWEEN ART AND COMMERCE, HARVARD UNIVERSITY PRESS, 2000.
- [9] 豊島区立郷土資料館編,トキワ荘のヒーローたち , 豊島区 教育委員会, 1986。
- [10] 藤子不二雄A, トキワ荘青春日記―いつも隣に仲間がいた, 光文社, 1996。
- [11] 梶井純, トキワ荘の時代, 筑摩書房, 1993。
- [12] 石森章太郎, トキワ荘の青春-ぼくの漫画修行時代, 講談 社, 1986。